

辻 誠一郎¹: 日本植生史学会創立 30 周年記念シンポジウム『植生史研究のこれまでとこれから』:
趣旨説明

Sei-ichiro Tsuji¹: The 30th anniversary symposium of the Japanese Association of Historical Botany
“Researches on the history of vegetation and human activities in Japan: their results and prospects”

植生史研究会が発足したのは1986年2月24日であるから今年2月で30周年、日本植生史学会へ名称変更したのが1996年11月であるから、今回の大会で20周年を迎えたことになる。植生史研究会の前身である植生史研究談話会の時代から、異なる領域・分野の交流と理解をはかることを大きな目的にしてきたことは、今でも変わっていないと思われる。

植生史は、単に植生の歴史ではなく、植生や植物群、それを取り巻いているさまざまな環境要素とのかかわり史、あるいは植生や植物群を包含する生態系の歴史をスタート当初から意味していて、当然のこととして人とのかかわりもこのことばの中に含まれていた。しかも、植生史の研究にかかわる分野は多岐に及んでいるため、植生を中心に据えて人とのかかわりを考える立場もあれば、人や人の活動を中心に据えて植物群や植生とのかかわりを考える立場もあって、同じ植生と人との関係史を読み解くにも、手法が大きく異なるということも珍しくないと思われる。それがこの学会の大きな特徴の一つとも言えるかもし

れない。ただ、会あるごとに確認をしてきたことの一つは、木材や種実などといった研究材料が異なる領域間や、植物学や考古学といった異なる分野間の垣根を越えた領域・分野融合の必要性であった。

植生史研究の課題は多様であると言ってよいが、2006年の日本植生史学会創立20周年記念大会でのシンポジウムは「人類時代の植生史研究と考古植物学—旧石器時代から江戸へ—」であり(図1)、それ以前の過去3回のシンポジウムは、第18回が「景観復元と時・空間スケール」、第19回が「先史時代におけるウルシの利用」、第20回が「縄文から弥生にかけての近畿の環境史—考古と古植生のデータから「弥生化」を考える」を課題に掲げており、まさに人と植物の関係史が本学会での主要な課題になっていることを示している。ちなみに、植生史研究会時代でも「人と植生の交渉史」「弥生時代以降の植生改変と破壊」「更新世から完新世、最終氷期から後氷期、旧石器時代から縄文時代—その急激な変動をめぐって—」をシンポジウムの課題に掲げており、「人類時代の植生史研究」を模索し続けてき



図1 2006年11月25日に東京大学法文2号館大講義室で開催された創立20周年記念シンポジウムでの辻の講演。この趣旨説明はこの講演のためのもので、講演題目「日本の植生史と人の活動史」からも理解されよう。

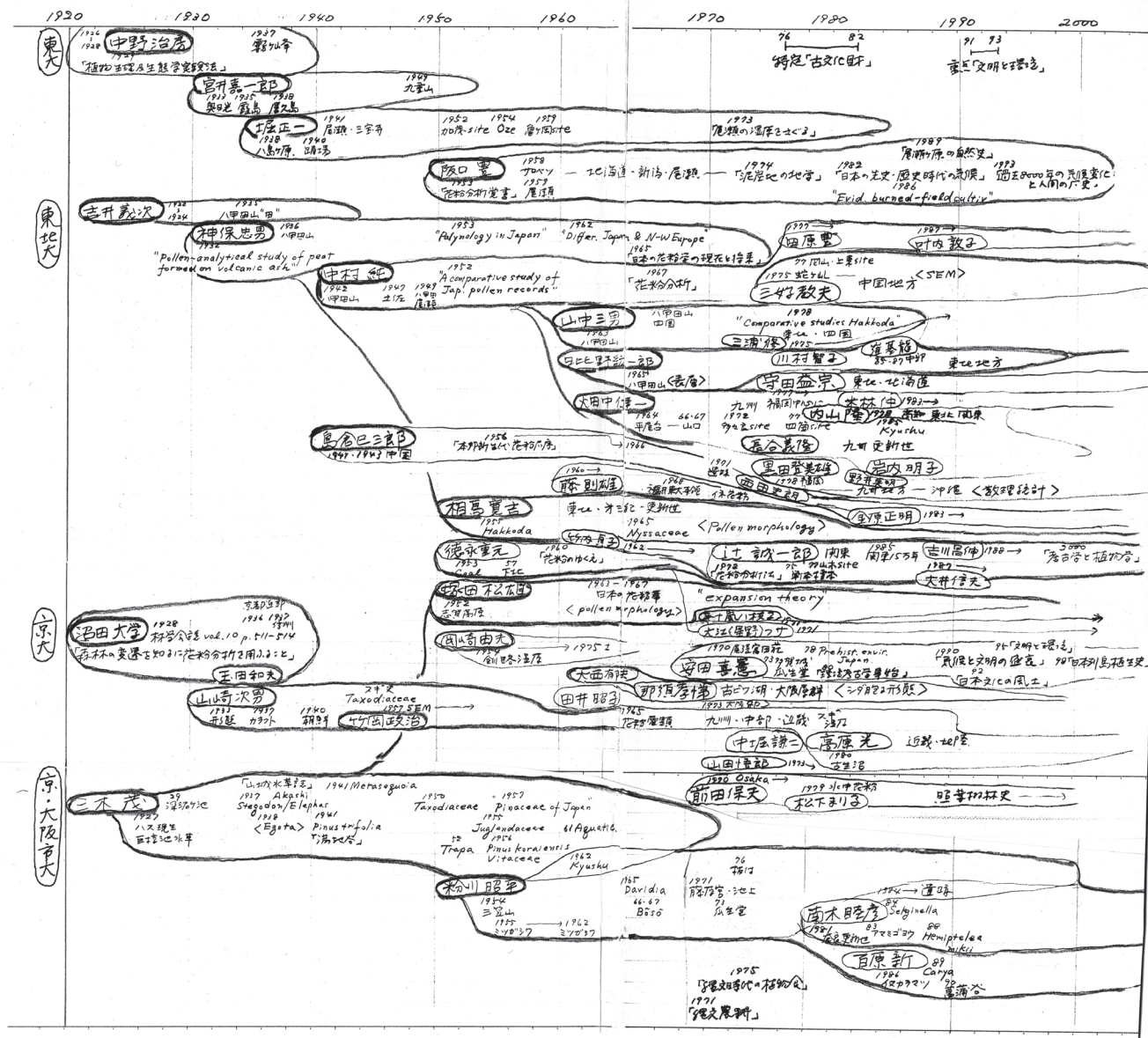


図2 2000年までの植生史研究にかかわった、主に花粉分析と大型植物遺体を研究した研究者の歴史的流れ(辻の手書きメモ)。

たと言っても過言ではない。

記念すべき年を迎え、この主要な課題を抱えながらどのようなことを明らかにできたのか、また関係領域・分野の統合と多様化を経ながらどのような課題が残され、また新たに浮上してきたのか、これら課題を通覧しながら今後どのような方向性が見出せそうかを概観しておくことは意味のあることである。

1970年代前半までの研究の流れ

1970年代前半は、考古学における植物遺体(種実遺体)の研究が一応の集成をみる時期であり、新しい方向性が示

される時期でもあった(図2)。1930年代の三木茂による植物遺体研究は日本列島の植物群の歴史の輪郭を種実で実証的に捉え、三木自身は考古学に関心を示さなかったが、直良信夫を刺激し、考古学での植物遺体研究を促した。渡辺直経は人類学の立場から、江坂輝弥や渡辺誠は考古学・民俗学の立場から、周囲の考古学者や植物学者をおおって、人の植物資源利用や農耕の歴史研究の道を開いた。こうした中で「縄文農耕論」が芽生えた。三木の弟子である粉川昭平が遺跡出土の植物遺体研究に傾倒するようになって新しい時期を迎えた。

1928年に沼田大學が花粉分析という手法を紹介して以

来、生態学や林学の研究者によって森林変遷の解明に花粉分析は大いに利用された。1950 年代にはヨーロッパでの完新世気候変化が中村純によって日本でも確かめられ、塚田松雄によって編年の精度の向上、定性から定量化への道が開かれていった。1970 年代前半には教科書や普及書が刊行されることで研究に拍車がかかった。こうした中で、花粉帯 RIIIb の設定と意義が人類干渉期と認識されたことがその後の研究の大きな布石となった。すなわち、花粉分析によって、水田稲作農耕の歴史とアカマツ林拡大に象徴される植生破壊（のち植生干渉、植生改変）開始の議論が始まった。

1970 年代後半以降の研究の流れ

考古学と深くかかわる植物遺体研究が多様化を遂げた時期である。それを引き起こしたのは、1976～1978 年と 1980～1982 年の 2 期にわたって実施された文部省科学研究費補助金・特定研究「古文化財」である。中村純を中心に「花粉分析による稲作史研究」、粉川昭平を中心に「栽培植物と植生変遷」、日浦勇を中心に「昆虫と植物遺体にもとづく遺跡環境の復元」、加藤晋平を中心に「動植物遺体による生業活動の復元」、藤原宏志を中心に「植物珪酸体による農耕史」の研究が展開した。関連する領域の研究者がチーム編成をして行う総合研究は流行となり、1970 年代前半までに構築されたさまざまな論理が追認され、また膨大な新たな事実が蓄積された。このことで多種類の栽培植物が弥生時代以降では広く確認でき、一部は縄文時代後晩期に遡る可能性が示された。花粉分析や植物珪酸体分析でイネ属が同定できるようになり、稲作農耕史の議論が一般化した。

こうした流れとは多少とも方向性を異にしたのが、福井県鳥浜貝塚での総合研究である。単一のいわゆる低湿地遺跡でありながら花粉・種実・木材といった植物遺体や、年代測定・火山灰層序など第四紀学のさまざまな手法が駆使されたことや、また縄文時代早期から後期という古い時期から栽培植物など注意をひく遺体が見出されたため、その後の低湿地遺跡調査の手本のような存在となった。

ともあれ 1980 年代前半頃までの人と植物関係史については膨大な資料が蓄積され、穀類を中心に多種類の栽培植物が記録されたこと、農耕の本格的な開始は弥生時代から古代にかけてであること、これに対して台地・丘陵から山地にかけての森林植生の変化は同調せず、縄文時代以降の森林資源利用など他の活動にかかわることなどが分かってきた。

生態系復元と未来可能生態系認識への道

1980 年代後半になると、各地で大規模な遺跡の発掘調査が実施されるようになり、低湿地だけでなく、低湿地を含む広大な集落遺跡が対象になることが増加した。植生史研究会が創設されたのは、まさにそうした発掘調査の盛りを迎えつつあった時でもある。当時、私たちがかわるることになったのは、調査の終盤を迎えつつあった福井県の「鳥浜貝塚」、埼玉県川口市の「赤山陣屋跡遺跡」、所沢市の「お伊勢山遺跡」、東京都の東北新幹線施設域である「中里遺跡」や「袋低地遺跡」などで、いずれも大規模開発にともなうものであった。その後、滋賀県の「栗津湖底遺跡」、佐賀県の「吉野ヶ里遺跡」、そして青森県の「三内丸山遺跡」を対象にすることとなり、「三内丸山遺跡」のように 20 年以上経て今も継続している遺跡がある。

これらの調査から引き出されてきた人と植物関係史の課題は、人の活動と自然の生態系の改変、人為的な生態系の成立・形成、人の資源利用あるいは生産活動、資源の消費・廃棄、このような人とそれを取り巻く環境系の歴史的变化といった、いわば生活者あるいはその集団と環境要素が織り成す生態系の構造と歴史的变化であった。これは発掘調査の対象となる遺跡そのものが大きな集落であり、さまざまな施設を有しているからこそその課題であった。この課題を達成するには、資源の採取から加工・保管といった技術や、生態系という宇宙・世界認識といった問題まで扱わなければならないことも分かってきた。

このような論理の構築と、生態系の空間構造を空間情報解析システムによって解析し、平衡・非平衡の程度や生態系の変化に深くかかわる人の活動の歴史的評価を目指すことも将来設計にぜひとも組み込まなくてはならない。

一方では、人と植物関係史を通して形作られる自然認識やものづくり・利用に見られる創意工夫を読み解くことも、研究の当初からの重要な課題であった。それらを網羅的に描き出すことすら、いまだ程遠い道のりの出発点に近いところで足踏みしている。残されている課題と、新たな課題への飛躍の二つを、どのように克服していくのか。それが問題である（図 3, 4）。

註）本稿は、2006 年 11 月に行われた日本植生史学会創立 20 周年記念シンポジウムにおける話題提供「日本の植生史と人の活動史—到達点・課題・展望」の要旨にもとづいた。

（¹ 〒277-8563 千葉県柏市柏市柏の葉 5-1-5 東京大学大学院新領域創成科学研究科、現：〒525-0041 滋賀県草津市青地町 1148）



図3 2016年11月19日に専修大学で開催された日本植生史学会創立30周年記念シンポジウムのパート2, パネルディスカッションの一場面。司会者, パネラー, そして実行委員長の辻がそい踏みといったところか (杉山真二氏撮影)。



図4 2016年11月19日の日本植生史学会創立30周年祝賀会の開会挨拶。記念シンポジウムの後、祝賀会が盛大に行われた。